

ひばりクリニックの感想・学んだこと

自治医科大学医学部5年 宗像隼太

この度はお忙しい中、自治医科大学院外実習にご協力いただき誠にありがとうございました。今回の実習では、外来診療から訪問診療、病児保育、レスパイトケアまで、様々な分野の見学をさせていただき、とても実りある実習であったと感じます。今回の実習にあたっての感想、学んだこと等を各々まとめさせていただきましたので、ご一読していただけますと幸いです。

・外来診療

3日間にわたって外来の見学をさせていただきましたが、一番印象に残っていることは、高橋先生ないしコメディカルの方におけるご利用者さんとの接し方でした。「患者ではなくご利用者と呼ぶ。」「ご利用者が診察室に入る時は立ってお出迎えし、椅子を勧める。」「診察が終了したら立って挨拶してお見送りをする。」といった礼に始まる礼に終わるという考え方。文字に起こすとさぞ当たり前のようなことでも、今までの2年間における病棟実習内でそのような当たり前のことを徹底して行っている医師と出会ったことはありませんでした。今まで自分が大学附属病院等の大きな病院の中で実習を行っているうちに診断云々・治療云々というような患者さん＝疾患といった頭になりつつあったということに改めて気づき、今後の実習や将来医師になった際の患者さんとの接し方の根本を学ぶことができました。

・訪問診療

外来見学同様3日間にわたって訪問診療の見学をさせていただきました。過去に私が地域実習などで見学をした訪問診療は、特別養護老人ホームで入居者を流し見するだけ、家に行っても薬の補充だけを確認して聴診器も使わない、といったものが多く、“こなし”のイメージがありました。そのため、高橋先生に同伴させていただいた訪問診療における感想は、利用者1人1人に対して接する・話す時間を長く取っているということでした。これまた当たり前の話ですが、医者がどれだけ忙しく、どれだけの人数の診察をしないとイケないとしても、患者さんにとってはたった1回の診察であり、絶対に医師の忙しさが伝わってはいけないものだと感じました。また、高橋先生は「話すこと」より「聞くこと」を意識されており、診察中は利用者や主介護者のみならず、そのご兄弟やお子さん・お孫さんにまつわるお話もよく聞いておられました。在宅医療を行う中で、利用者さんがより安心でき、より普段の生活に近づけるためには、利用者のバツ

クグラウンドをよく知ることが大切となることを学びました。

・病児保育

病児保育「かいつぶり」では、喘息発作や持続した下痢嘔吐、著しい脱水などの理由で学校に通うことのできない児童の日中一時のお預かりをしていました。仕事や病気などで日中は子どもの面倒が見れない親御さんにとって、子どもが体調を崩した、病気になった等、人の目が必要になった時に預けられる場所があるということが、どれだけ安心できる存在であるかを学ぶことができました。

・レスパイトケア

「特定非営利活動法人 うりずん」での実習では、日中一時支援、児童発達支援、放課後等デイサービス、在宅支援、移動支援の見学を行わせていただきました。実習初日「うりずん」の代表の方から施設のお話を伺った際に、「ここでは重度障害者の、、、」「日中に重度障害者が、、、」といった説明を受けていたため、どれだけの重症の子がいるのか、仕事はとても大変なんじゃないか、などと正直思っていました。しかし、実際に子供たちと会ってみると、多少コミュニケーションが取れなかったり車椅子がないと移動ができなかったりするだけで、楽しいことには笑い、嫌なことには泣く、他の幼稚園などと変わらない子供たちでした。とは言っても、知的障害や排泄介助を必要とする子供であり、一般的に親御さんは日中子供の介護に追われ、呼吸器管理が必要な子の親御さんの場合は寝る時間を削ってまで呼吸器管理を行っているのが現状。そのような親御さんがお子さんを預ける施設は通常無い場合が多く、仮にあったとしても預けに行く手段が無い場合、親御さんは仕事も行くことはおろか、病院へ予防接種を受けに行くこともできない家庭もありました。そのような家庭にとって、日中一時支援や移動支援、在宅支援がどれだけ時間的・精神的救済になっているかを実際の利用者に伺うことができました。しかし、表面的に明るい話で済まない一面も実習中に見ることがありました。それは実習中チョコにデコレーションをするバレンタイン企画があり、お子さんと一緒に行くということだったので、お子さんの手を握りながらチョコに絵や飾りを作っている時でした。私は少しでもお子さんが楽しめるよう、その子の手にはペンを握らせて、力も入れさせる。飾りもお子さんの手に乗せてから、一緒にパラパラとかけてあげる。そのような形でデコレーションをしていました。当然ですが、形はあまり綺麗にはならず、時間もかかりましたが、その子にとっては貴重な経験であると考えてその子主体で作れるようにしてあげていました。しかし、周りのスタッフはほとんど自分でデコレーションを済ませ、挙げ句の果てには「遅いよ、皆もう終わってるから」「学生さん、センスない」

などと言われるまでであり、保育面においてどの程度までお子さんを尊重して行うべきか難しいところもありました。障害を持った子供たちであっても色々な刺激を与えてあげるといふ理念はありますが、確かにレスパイトという観点から親御さんの休息、心のケアに重きをおけば、作らせる・飾らせるといった点より、作りました・飾りましたという点をアピールした方が親御さんの満足度は高く、お子さんにやらせても時間的効率が悪い、生産性が悪いと考えた場合には、そういったパフォーマンス的なレスパイトの方法も取る必要性があるという内面的な難しさも学ぶことができました。

4日間という短い時間ではありましたが、高橋先生ならびにひばりクリニックスタッフ、うりずんスタッフの方のご指導のもと、とても貴重な体験をすることができました。これからは「ひばりクリニック」「うりずん」での貴重な体験を糧に責任と自覚を持って日々精進して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。本当にありがとうございました。